

金管バンドの基礎練習教材を考察する

— 藪内輝雄メソッドの研究 —

Considering Basic Practice Materials for Brass Bands

— Research on the Yabuuchi Teruo Method —

織茂 学 *ORIMO Manabu*

(音楽領域)

【要約】

金管バンドの代表的な楽器としてトランペット／ホルネットがあげられる。トランペット／ホルネットにはさまざまな音色があり、鋭い音、柔らかい音、明るい音など、その多彩な音色は管楽器の花形と呼ばれるだけのことはある。昨今、そのトランペット／ホルネットを始め、金管楽器の指導について、たくさんの教則本やメソッドが発刊されているが、残念ながら音は硬く、低い音域の音は響かない傾向が見受けられる。そのような中、トランペット奏者の山本武雄氏が代表を務める「東京ブラスソサエティ」のホルネット奏者であった藪内輝雄氏のメソッド（これを「藪内メソッド」と呼ぶことにする）は、異彩を放っている。それは私が小学校6年生の時に創部されたマーチングバンドクラブで始めたホルネットが1カ月もかからずに良い音が出、4カ月後のマーチングコンテスト群馬県大会で県代表となり関東大会に出場できたかなり昔の私の個人的原体験に基づく。当時の成果がどのように生まれたのか、改めて研究したいと思った。そこでこの藪内メソッドに基づき、初めて金管楽器を始める小学生から大人の再学習まで使える練習方法について考察する。

はじめに

なぜ大学でピアノ専攻していた私が金管楽器のメソッドについて書いているかというところから始まる。最初、顧問の先生から「ピアノを習っているのだから一緒にやろう」と声をかけられ、「金管楽器の詳しいことは知らないし、でも同じ音楽だしなあ」と迷っていると、「絶対将来の役に立つからやろうよ！」という先生の熱意に押され入部した。入部して楽器を決めるのに後ほど述べる楽器決めの方法を経て、私は体が小さかったという理由もあり、楽器の中で一番小さいホルネットの担当になり人生で初めて金管楽器に触れることとなる。この出会いが現在、吹奏楽・オーケストラの指揮指導の仕事につながるから不思議である。所属のマーチングクラブの楽器編成は木管楽器がない金管楽器だけの編成、英国式金管バンド（＝ブリティッシュスタイル金管バンド）である。このスタイルを語るには日本における金管バンドの歴史からお話したい。

最近判明したことだが、私が所属していた細井小マーチングバンドクラブは、トランペット奏者である山本武雄氏が創設し、今も活動を続けている「東京ブラスソサエティ」のメンバーであった藪内輝雄氏による「藪内メソッド」を使って練習していた。その時の映像が残っているが、小学生の演奏ではあるが今でも良い演奏だと思う。このような音を出す練習方法はこういったものであったのか。指導されていた先生の発言で印象に残った言葉と手元に残っている楽譜のみが当時の記憶の全てなので、何をどうすれば良いかとい

う「理論と方法」が大きく抜けていた。そこで、細井小マーチングバンドクラブの指導者で恩師である森村淳史先生に連絡を取り、「藪内メソッド」についてご教授いただいた。当時私たちはどのように「藪内メソッド」を実践し、柔らかい音が出すことができたのか、上達が早かったのか、森村先生のお話と私の体験をもとに解明し、今後の実践の糧としたい。

第一章 昨今の吹奏楽・マーチング・金管バンドにおける音楽性の評価

近年の吹奏楽コンクール・マーチングコンテストにおける演奏は、「音量」「音程」「拍の縦」「テンポ」「強弱」などが主に評価されていることが多いように見受けられるが、「音色」「音量バランス」「構成美」も同様に評価すべきである。なぜなら吹奏楽や音楽コンクールは、音楽の自然な流れや音の色彩感、構成の美しさからもたらされる「心地よさ」の持続性が重要だと考えるからである。特に「音色」に関しては、曲の最初の一音がその後の評価に大きく影響してくるのは否めないと思う。

数年前、小学6年生のときにマーチングバンドクラブに誘ってくださった森村先生から群馬県マーチング協会・群馬県バトン協会主催のマーチング・バトントワーリングフェスティバルの審査にお招きいただいたことがきっかけで、恩師と30年以上前に自分が体験したマーチングの話になった。その時の音色、温かい音、このサウンドこそが、私のピアノや吹奏楽、オーケストラはじめさまざまな編成の楽曲における音色とバランスにこだわった指導の原点となっている。以下の章では私が吹奏楽・オーケストラの指導をしている中で、小学生で初めて金管楽器に触れる子どもたちをはじめ、練習で悩んでいる方々にこのメソッドの有効性をお伝えすることで、音楽レベルの向上や悩みの解消に資する取り組みにつなげたい。

第二章 藪内メソッド——導入編

「藪内メソッド」は一体何かというと、日本初の英国式（＝ブリティッシュスタイル）の金管バンドである東京ブラッソサエティの元メンバーで、現在、雀宮ユースバンドの指導講師である藪内輝雄氏が考えられたメソッドである。東京ブラッソサエティは、トランペット奏者の山本武雄氏が東京芸術大学を卒業後、トランペット奏者だけでなく、金管アンサンブルの指導者として活動している中、1972年に日本初の本格的なブリティッシュスタイルの金管バンドとして設立された日本における草分け的存在のバンドである。今回は小学生が初めて金管楽器を始めるところから、大人まで使える有効的メソッドとして自分の実体験に基づいて提示する。

①呼吸

呼吸には胸式呼吸と腹式呼吸があり、簡単に言うと普段の日常生活の呼吸は息を吸った

ときに胸が膨らむ胸式呼吸で、歌う時や楽器を吹く時は息を吸ったときにおなかが膨らむ腹式呼吸である。ではどうして腹式呼吸なのか。胸式呼吸は横隔膜をあまり動かさない浅い呼吸のため素早く吸うことはできるが、一度に吸える量は少ない。一方、腹式呼吸は息を吸う際に肺の下の横隔膜を大きく動かす呼吸法で、一度に吸える空気量も多く、胸式の3倍以上になることから、楽器を吹くには腹式呼吸を使うことで音の長さが持続できたり、音程が安定したり、音の強弱をコントロールしたりできるため、選ばれている呼吸法である。これは合唱でも同じことが言える。

なお、腹式呼吸とは、日本医師会のサイトによると、

「背筋を伸ばして、鼻からゆっくり息を吸い込みます。このとき、丹田（おへその下）に空気をためていくイメージでおなかをふくらませます。次に、口からゆっくり息を吐き出します。おなかをへこましながら、体の中の悪いものをすべて出しきるように、そして、吸うときの倍くらいの時間をかけるつもりで吐くのがポイントです。胸で息を吸うのではなく、おなかに空気を入れて呼吸すること」

とある。

とは言っても、慣れるまでは意識しないと腹式呼吸は難しいので、簡単にできる腹式呼吸の練習方法を3つ挙げたい。

・練習方法1

- 1) まっすぐに立って、体にある空気を勢い良く吐き出す
- 2) 吐ききったら、いったん止める
- 3) そして素早く口を開ける
- 4) すると一瞬だが、おなかに空気が入る

・練習方法2

- 1) 上半身を90度曲げて息を吐く
- 2) この状態で、4拍カウントで（1、2、3で吐いて、4で勢いよく吸う）、そこで息を止めてから勢いよく吐く（この時点で自然と腹式呼吸になり、胸で呼吸するとむせる）
- 3) 慣れてきたら、90度から少しずつ体を起こして（80度、70度…etc.）、まっすぐに立つまで何回か繰り返す

・練習方法3

- 1) 仰向けに寝ながら息を吐く
- 2) おなかを意識して呼吸する

以上、3つのどの方法でも簡単におなかの方へ空気が入っていることが実感できると思う。この方法により、意識的に腹式呼吸をしようと思わなくても実は既にしているということになる。ただし、腹式呼吸に慣れていないうちに楽器で吹く動作を加えると、演奏することに意識がいきなり無意識に胸で息を吸っていることがあるので、これら3つの練習を続けることで腹式呼吸を体で体得でき、どんな時でも腹式呼吸することができるようになると同時に、1回に吸って吐ける息の量がだんだんと増えていく。つまり、腹式呼吸に共通していることは、先に「息を吐く」ことが大切である。大きな音、長い音を出したいという気持ちからどうしても「息を吸う」方だけに意識が集中してしまいがちだが、最初に息を吐いて体の中の空気を空にしておかないとより多くの息を吸うことはできない。これが腹式呼吸の最大のポイントである。

この呼吸の練習の成果を確認する方法は、「長息競争」というゲームを提示する。

メンバー全員参加で息がなくなった人から座るという肺活量が多いか少ないかをゲーム感覚で体感できる簡単なゲームである。

ルールは、

1. まず、全員起立して体の中にある息を全て吐く
2. 合図とともに腹式呼吸で息を吸って長い時間かけてゆっくり息を吐く
3. 息がなくなった人から座っていく

腹式呼吸がうまくできない場合は、練習方法3のように床に寝てから上記ルールと同じようにし、息が終わったら起き上がる方法でも構わない。このゲームは体の大きさや年齢は関係なく、実例として小学校4年生の男の子が体の大きな6年生の男の子より長く息を吐いて1位になることがあったと、先生が当時のことを覚えていて話してくれた。

②楽器決め

楽器の決め方は、小学生ならば誰もが花形の楽器であるトランペット／ホルネットを選びたくなることが多い。ただ、全員がトランペット／ホルネットというわけにはいかないので選ぶ基準として、体の小さい児童は小さい楽器、体が大きい児童は大きい楽器というように、体の大きさの差で選ぶというのが一番わかりやすいと思う。その次は、本人がやりたい楽器を選ぶことで、自分で選んだからこそ責任をもって練習できる。各楽器（パート）の人数の問題や体の大きさなどで、やむを得ず楽器をコンバートさせる時は、楽器を変わってもらいたい本人に、その楽器の魅力や魅力を丁寧に説明してその楽器の良さをわかってもらうことが大切である。特に小学生の場合、大人が今までの指導経験から児童の口の形を見てその児童に向いているからといって楽器を決めてしまうと、本人が希望する楽器で

はないから辞めるということになりかねないので、児童のやる気をなくすような決め方は指導者として避けることが重要である。

続いて楽器の取り扱い方について。小学生だけでなく初めて楽器に触れる人は、ケースの上下がわからないことがあり、つい上下逆さまにして開けてしまい楽器を落として壊してしまう事例がある。ケースを横から見て幅の広い方が下、幅の狭い方が上とわかりやすく説明することで楽器の破損が防げる。そして楽器を取り出す場所は高い位置でしないようにする。高いところでケースを開くと楽器を落として破損する恐れが大きい。また、マウスピースはどの楽器でも小さくとても手から滑り落としやすいため、楽器に落としたり床に落としたりしやすいので、マウスピースの取り扱いはなるべく楽器の真上で扱わないように注意が必要である。そして、楽器につけるときは、楽器の穴に対して真っすぐ入れたら少し右に回す。反対に取る時は少し左に回してから真っすぐ手前に引く。このように丁寧に扱うことで、マウスピースが変形したり楽器から抜けなくなったりすることを防ぐことができ、修理代もかからないため一石二鳥である。

③口の形

楽器が決まったらいきなり楽器を持つのではなく、まずは、赤ちゃんが唇でブーと振動させる（マウスピースなしのバジング）練習をさせて唇を柔らかくするところから始める。続いてその振動を各楽器のマウスピースに伝えて（マウスピース有りのバジング）練習をする。その際いつでもバジング練習できるように、各楽器のマウスピースの大きさに合わせた巾着袋の中に、小さいタオルのようなものを入れてマウスピースを直接入れても傷がつかないように工夫したものを用意する。特に小学生には「決して入れて振り回すものではなく、硬い金属の塊なので当たれば当然けがをする」と説明して取扱注意を促すことも大切である。

次に楽器を持つ前に口の形を決める。口（＝アンブシュア）の形は、普通の口の形は上唇と下唇を合わせて少し横に引くかたちだが【写真1】【写真2】、藪内メソッドの場合は口を横にするのではなく下唇を少し引く。下唇の赤い部分が上唇に隠れるぐらいとなっている。つまり上唇よりも下唇が出ていない形である【写真4】【写真5】。ただし、チューバに関しては下の音域・ペダルトーンが出にくくなるためこのアンブシュアは当てはまらないので注意が必要である。

口の形が決まったらマウスピースでバジングをする。普通の口の場合はマウスピースの向きは真横になるのに対して【写真3】、上記のように下唇を引くアンブシュアなのでマウスピースの向きは下向きになる【写真6】。当然、楽器につけて構えた時もマウスピースの角度のまま楽器を付けるので、トランペット／ホルネットとトロンボーンの違いが少し

●通常の口のアンブシュア

【写真1】



真っすぐ

【写真2】



上下の唇は同じで横に引く

【写真3】



マウスピースは水平

●藪内メソッドのアンブシュア

【写真4】



少し左斜め

【写真5】



上唇で下唇を隠す

【写真6】



マウスピースは下向き

通常の楽器の構え

【写真7】



藪内メソッドの構え

【写真8】



下向きに、アルトホルン、ホルン、ユーフォニアムは楽器が少し下向きになる。この構えの良いところは、腕力が無い小学生は元より、大人も無理に楽器を持ち上げる必要がなくなるという利点がある【写真7】【写真8】。また、私たちの時代のマーチングのベルアップは背中が反るほど大変な態勢だったが、最近のベルアップの角度自体は10度くらいなので顔ごと上を向いても大変な態勢にはならないという変化があるようで、元から下を向いているアンブシュアでのベルアップでも唇や顔に負担がなくて優しい。

実際にマウスピースだけで練習する際、決して高い音を吹くのではなく、音量は小さくてもよいので低い音で鳴らすことが大切である。このアンブシュアは、ブリティッシュスタイル金管バンドとして非常に長い歴史を持ち、数々のコンテストで多くの優勝を誇る世界的に有名な「ブラック・ダイク・バンド」の奏者のアンブシュアがこの下唇を上唇で隠す方法で、その音色は実に柔らかく艶っぽい音色であり世界的に認められている。

④楽器の扱い方

1) ピストン

楽器が決まったら毎日の習慣と手入れ方を教える。まず、楽器ケースを開け取り出した時にすることは、各楽器1番～3番（4番）のピストンのねじが動くかどうか、ピストンの下の受け皿のねじが動くかどうか、トロンボーンの場合はスライドが動くかを確認する。動かないときは無理して回さないようにする。続いてオイルを差すのだが、方法は楽器を斜め横にしてピストンを半分程度出して差す。なぜ全部抜かないかというと、ピストンを落とす可能性があり、落としてしまうとすぐに変形し2度と入らなくなるからである。音がうまく出ないときはピストンの向きに問題があることがあり、ピストンにはそれぞれ「1・2・3等」と番号がふつてある（楽器によっては1と3しかない場合もある）が、その数字がマウスピースの方向に向いていることを確認して入れる。

2) トリガー・管

各トリガー・管が抜ける・動くかどうかを確認する。その際、楽器メーカーなどからスライドグリスやスライドクリームが発売されているが、これの塗りすぎで固まってしまうトリガーやトロンボーンのスライドが動かなくなることが多く発生するので、これを防ぐために、各トリガー・スライドにはクリーム類は塗らず、バルブオイルのみを、トロンボーンのスライドにはバルブオイルと霧吹きを用いることで故障を防ぐことができる。特に各楽器、指で音程を調節するトリガーは動くようにゆるゆるの状態にしておくことが大切で、特にトランペット／コルネットの1番トリガーは左手の親指でスムーズに動かせるようにし、同じく3番トリガーは、楽器を立てた状態にして3番ピストンを押したら下に落ちる状態にしておくことが望ましい。これを確かめるときは、3番ピストンのトリガーにあるストッパー（ねじ）が効くようにしておかないと床に落下してしまうので注意が必要である。

3) お手入れ

日々の習慣のお手入れについては先ほど述べたが、楽器の金属部分は月1回、水またはぬるま湯を湯船に張り、プラスチック（プラスチックがなければ食器用の中性洗剤でも代用可）と楽器ブラシで洗うことが大切である。なお、ピストンやばねなど、水に弱いところは避ける。そして、全てが乾いたらバルブオイルを差して元通りに組み立てることで、楽器は長持ちする。

第三章 教内メソッド——基礎編

楽器の扱い方を学んだところで、いよいよ楽器にマウスピースをつけて音を出すのだが、一般的に低い音から吹かせず、唇に負担のかかるチューニングBのような高い音から吹かせることが多い。おそらく、みんなで一斉にチューニングをすることが目的となっているためと思われるが、このチューニングBは、初心者にとって高い音であり、習いたてに吹く音としては負担の大きい。従って、負担の少ない各楽器の下の「記譜のド」から下の音作りをしていくことで、唇や口の周りの筋肉に負担がかからないようにしてから音作りをすることが大切である。下の「記譜のド」から作ることで、体全体が力んで鋭い音しか出なくなるのを防ぐ狙いがある。また、ドから下の音（さらにはペダルトーン）は、唇そのものが柔らかく出ない音なので、ここから音作りをしていくことで柔らかい音色で、かつ、高い音になっても力みがない音が楽に出せるようになる。従って、まずは各楽器の下の「記譜のド」から下を覚えることが大切である。

①低い音域の音の練習

下の「記譜のド」が出るようになったら、上に上がるのではなく、下に下がる方から進める。二分音符や全音符など音価の長い音符、特に最後の拍は音を抜かず、しっかり二拍なら二拍、四拍なら四拍伸ばしてから切ることを癖づけることも大切である。安定した音が出てきたら、さらに下のペダルトーンと呼ばれる音域の音を練習してもよい。たまにチューバやホルンが下の音域が要求されることがあるので、その音域の音も出せるとより良い。

②ロングトーン

先に述べた通り、チューニングBでのロングトーンは初心者にとってハードルの高い練習であると思う。低い音ならチューニングBにこだわらず何でも良いので、その音を長く伸ばす練習はロングトーンになるのではないかと思う。成果の確認方法は、先ほど述べた「長息競争」を使用し、全員参加で何の音でも良いので音が出なくなった人から座るというゲーム感覚で確認ができる方法が良い。

③指を早く動かす

トランペットをはじめ、チューバなどのピストン・ロータリー楽器は早く指を動かすこと、トロンボーンは腕を早く動かす練習が必要になる。ブリティッシュブラスには木管がないため、金管楽器で速い連符を演奏しなければならないからだが、吹奏楽だからとか金管ソロだから速く動かさなくても良いということはない。昨今の吹奏楽曲の元曲はブリティッシュブラスのものがあるので、どんな連符の多い譜面でもスラスラ吹けるようにすることが大切である。音価が短く速いパッセージがきれいにできれば、音価の長いゆっくりとしたパッセージも当然きれいに吹くことはできる。

④リップスラー

リップスラーの練習をすることで、唇が柔らかくなり音色に艶が出る。硬軟両方の音色を使いこなすためには、リップスラーの練習は欠かせない。また、長い時間練習しても疲れにくいアンブシュアが出来上がる。昨今の吹奏楽の練習で一番欠けているのがこの「リップスラー」である。このリップスラーこそが、良い音程、良い音など、音を決定づけるものであると確信する。最後に譜例を載せるので、毎日少しずつで構わないが徹底的に取り組んでいくことが大切である。その際できる限りテンポを速くしていくことが望ましい。

第四章 藪内メソッド——実践編

次に「藪内メソッド」のデイリートレーニングを紹介する。さまざまな種類の課題を行うのではなく、単純ではあるが以下の練習を毎日繰り返す。これが「藪内メソッド」の神髄であり、柔らかい豊かな音色の礎となる。スムーズに音が出るまでは、【楽譜1】から順に進めていくことをおすすめする。なお、今回、藪内氏オリジナルのメソッドを、少しアレンジしたものを提示する。

- ①低いB（Low B）からスタートし、記譜のドを安定させる。安定してきたら、そこから少しずつ下に下がっていき、下の音域の音作りをする【楽譜1】。その際、4拍目の音

【楽譜1】

Trumpet in B[♭]
Cornet in B[♭]

Horn

Trombone
Euphonium
Tuba

の最後を抜かない=次の小節の1拍目の直前まで伸ばすことが大切である。ここでは音の安定感を作ることが目的なので、記譜のドより上の音は吹かせないことが大切である。注意すべきことは、決して音を跳躍させずに進行させることである。なお、最後の小節の『←』(左矢印)は、最初に戻っていくことを示している。

②【楽譜1】ができたなら【楽譜2】へと進む。

トレモロになっている2つの音を吹くのだが、この2つの音をいかにピストン・ロータリーなら指、スライドなら腕を速く動かし、速く吹くことができるかが大切である。もちろん、最初はゆっくりでよいが、その際に、各全音符は【楽譜1】と同じようにしっかりと最後まで伸ばすことを癖づけておくと、速くなってもしっかりと4拍伸ばすことが身についていく。

【楽譜2】

③【楽譜2】ができたなら【楽譜3】へと進む。

この練習も、【楽譜2】と同じように最初はゆっくりから始め、次第に早くしていく。上記2つの練習は、速く指を動かすことによって、金管楽器ではあまりみられない連符が連続していても、木管楽器や弦楽器やピアノのように連符をととても簡単に吹くことができるための訓練である。

【楽譜3】

④ 【楽譜 3】 ができたら 【楽譜 4】 【楽譜 5】 へと進む。

次は上行系。記譜の下から上の記譜のソまでを滑らかになるまで吹く。

【楽譜 4】 と 【楽譜 5】 の違いは、最初の駆け上がりは一緒だが、次に下るか、それとも上るかの違いである。この練習は【楽譜 3】 と 【楽譜 4】 を繋げて行くと効果的である。なぜかという、連符の行と帰りの音のスピードがずれていることに気付くことができるからである。練習を重ねてチューニング B が楽に出るようになったらそこから最高音を上げていき、さらに上の B まで行くことができれば、どんな曲でも演奏することが可能である。子どもも大人も高い音を出せるとかっこいいと思うことが多く最初から高い音を出そうとするが、高い音の時はどうしても力んでしまい体が固くなるため、かえって高い音だけでなくより柔らかく出ないと出ない低い音も出なくなってしまうという弊害が起こるので注意が必要である。

ここで「High B (ハイビー)」と呼ばれる、どの楽器の低い「ドの音」の 2 オクターブ上の音を高い音の 1 つの目安として呼んでいるが、本来ならばその上の音も出るのが、この「High B」という言葉を使うことで子どもたちを始め全ての人が言葉から受ける印象で高い音という意識になり、「High B = 高い音 = 難しい → 限界」という心理状態となりこの言葉を知らなければいくらかでも高い音が出るにも関わらずそれを奪うことになるので、どこまででも音が出られるようにするには、指導者が簡単に「High B」という言葉は使用しない方が子どもたちは抵抗がなく高い音を吹くことができたのは、私も含めて体験した結果である。

【楽譜 4】

【楽譜 5】

※ 【楽譜 4、5】 は、上りきった音を徐々に上げていく

⑤【楽譜6】の半音階の練習はどのような楽器でも必要不可欠で、変化記号がない曲は簡単な曲を除けばほとんど付いているので、曲を演奏するにあたり突然出てきても動じないためにも、普段の練習から指を覚えておく必要があるために取り入れることが大切である。

以上の練習をするにあたり大切なことは、

- ・下の音域の音をしっかりと鳴らす
- ・唇を柔らかくする
- ・指を速く動かす

この3つとなる。

【楽譜6】

Musical score for Exercise 6, featuring B[♭] Tpt., B[♭] Cor., Hn., Tb., Euph., and Tuba. The score shows a half-tone scale exercise in 2/4 time, marked *mf*.

⑥【楽譜7】【楽譜8】のリップスラーの練習は、できる限り速くできるようになるのが望ましい。

【楽譜7】

Musical score for Exercise 7, featuring B[♭] Tpt., B[♭] Cor., Hn., Tb., Euph., and Tuba. The score shows a lip slurs exercise with fingerings indicated above the notes.

【楽譜 8】

0 2 1 1 2 2 3 1 3 1 2 3

B^b Tpt.
B^b Cor.

Hn.

Tb. 1

Euph.
Tuba

0 2 1 1 2 2 3 1 3 1 2 3

【楽譜 9】

0 1 2 3 0

B^b Tpt.
B^b Cor.

Hn.

Tb. 1

Euph.
Tuba

0 2 3 (B管) 1 2 0

0 1 2 1 2 0

- ・ 0 1 2 3…ピストン及びロータリーの指使い
- ・ 1 2…数字の併記はピストン及びロータリーを同時に押す
- ・ Horn は基本F管。ただし、【楽譜 9】の2小節目のみB管にする
- ・ Tb.1 2 3…トロンボーンのスライドのポジション（ロータリー未使用）

これらを毎日繰り返すことで、柔軟で持久力のある口が出来上がり、その結果、柔らかい音色の音が出る。

第五章 まとめ

音楽を色彩感豊かに表現するには、音量の大小（強弱）と良い音色であることがセットである最重要課題だと考える。そのためにも奏者一人ひとりが良い音とは何だろうという意識をもって藪内メソッドを毎日反復練習することで良い音色になるだろう。インターネットが発達しているこの時代、金管バンド・金管ブリティッシュスタイルで検索すると演奏動画が見られる。それを見ていただくとアンブシュアと音色が、日本とは全く違うことが一目瞭然と確認できる。オーケストラだからとか、吹奏楽だからとか、金管バンドとか、住み分けをするのではなく、どのような編成であれ、聴く人にとって心地よい音とは何かを常に考え、目標となる音に対するこだわりを追求していくことが重要である。

謝辞

本稿は、当時群馬県前橋市細井小学校の教諭でマーチングバンドクラブの顧問を務めていらっしゃった恩師、森村淳史先生に、お忙しいところお時間を割いていただき、ご教授賜りましたことを心から感謝申し上げます。

引用文献

公益社団法人 日本医師会 WebSite https://www.med.or.jp/komichi/holiday/sports_02_pop.html

引用楽譜

雀宮ユースバンド WebSite <https://www1.linkclub.or.jp/~yabuuchi/Lesson%28I%29.html>